

川柳が前句附から起こったことはご存知だと思います。前句附を沢山募集して興行する、いわゆる「万句合」

そして、その万句合の中でも人気のあったのが、柄井川柳の選出する「川柳点」でした。後に発行される柳多留は、それら万句合の刷り物の中から、「一句でも意味の通じるもの」を抜き出してまとめたものです。

この「一句でも意味が通じる」という点を考えて見ますと、現在一般に、古川柳として理解されている「柳多留」は、「前句附」として作られた作品であり、現在私たちが楽しんでいる「川柳」とは作品に対する前提が違うことに気が付きます。もっとも、柳多留が流行るにつれ柳多留に掲載されることを目的に「一句で意味の通じる作品」を万句合に投稿する人たちが増えたであろうと推測はできますが、これは専門の研究者の方々の今後の成果を待ちたいと思います。

さて、私たちは句会で「課題吟」を楽しんでいます。現代の課題吟は万句合と違って、「一句で意味の通じること」を前提に作られているはずですが。しかし実際には、題があつてはじめてその評価が下される作品が少なくありません。川柳句会はどちらかといえば閉じた系でありますから、回を重ねるにつれ、参加者の中だけで理解される暗黙の表現形態が生まれ、育ちやすくなります。

例えば「あらあら」という課題に対して

A テレビほど大盛りじゃないラーメン屋

B サンプルと似ても似つかぬオムライス

という作品が選ばれたとします。

AとBを見比べてみてください。

Aの作品は「あらあら」という課題がなくても、

「チャーシューが大きいとテレビで取り上げられていたのに、実際はそれほどでもない」

「テレビで見た物凄い大盛の定食屋だと聞いて行ったのだけれど、そこまでじゃなかった」

など、句で表現されている「ラーメン屋さんで大盛り」という状況以外の事柄まで読み手が創造を膨らませることができません。

では、Bはどうでしょう。

「どんなオムライスだろう？」

という読み手の想像は、課題の「あらあら」があつて初めて

「タマゴがうまく巻けなくて、具がはみ出しているのかしら？」

「サンプルはきれいな黄色なのに、ところどころ焦げがあるのかしら？」
というふうになります。
つまり、Bの作品は「前句附」なのです。

もう一つ例を挙げましょう
世の中はそういう風にできている
という作品。

これだけではどう理解していいか判りませんね。
この句の課題は「気の弱いこと 気の弱いこと」です。
課題を聞くと、句の意味が広がっていきますね。これが前句附です。

私たちが楽しんでいるのは川柳です。前句附という断りがない限り「川柳＝一句で意味の通じる」作品を目指すことが大切です。

この川柳と前句附の違いに対する理解は、作句の推敲時に役立てることができません。
自分の作品に対して、元になった課題とは別の題が付くかどうか検討してみるのです。

こうすることで作品と課題との距離感や、一句で成り立つ作品なのかどうか判ります。
また、過去に作られた作品の「課題」を考えてみることで、作句時とは違った頭の使い方をすることになり、着想のトレーニングに役立ちます。

試しに、いくつかの句をご用意しましたので、それぞれの「課題」を考えて見ましょう。

赤信号みんなで渡るから怖い

真ん中を凹ませて焼くハンバーグ

コンセント抜いた犯人社長です

二、三回メールが届きそれっきり

頬杖をついて乙女になっている